

# 形見としての『和泉式部日記』

## 渦 卷 恵

### 一、女性による仮名日記の創出

『古今和歌集』（延喜五305年奏覧）に付された紀貫之による仮名序冒頭には、

やまと歌は人の心を種として、よろづのことの葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを見るもの聞くものにつけて言ひ出だせるなり。

とある。<sup>1)</sup>真名から仮名へという文字伝達の方法の拡充は、「国風文化」の発展の大きな支えとなった。その過渡期に仮名を用いて自らの体験を散文で綴ろうとしたのが、同じく貫之の書いた『土佐日記』（承平五335年以後、一、二年の成立）であった。「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり」という冒頭は、仮名によって綴る日記の先駆

けとなり、以後の女性の手になる日記作品の呼び水となった。仮名序を手掛けた貫之ならではの、新たな表現手法の創出であったといえよう。一方で、女性に仮託し、亡き子への哀惜の情や帰京後の不安などを主眼とするかと言えば、必ずしもそうでない。せっかく女性を書き手として設定しながら、女性ならではの苦しみや悲しみに筆を尽くされてはいないため、あくまで「仮名による日記」の枠組みを設定した功績にとどまるものであった。

続いて、藤原道綱母は、和歌の贈答を媒介にして自身の日々の記録を赤裸々につづった『蜻蛉日記』（天曆八554年から天延二574年の記事）を世に問う。冒頭部の序には、

かくありし時過ぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり。かたちとても人にも似ず、心魂もあるにもあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと思ひつつ、ただ臥し起き明か

し暮らすままに、世の中に多かる古物語のはしなどを見れば、世に多かるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなむ、天下の人の品高きやと問はむためしにもせよかし、とおぼゆるも、過ぎにし年月ごろのこともおぼつかかりければ、さてもありぬべきことなむ多かりける。

と、傍線部のように自分を謙遜しながらも「天下の人の品高き」暮らしのありのままを開示するのだと、執筆動機が語られる。また、上巻末尾には、

かく年月はつもれど、思ふやうにもあらぬ身をし嘆けば、声あたらまるもよろこばしからず、なほものはかなきを思へば、あるかなきかの心ちするかげろふの日記といふべし。

とあり、自らの文章を『蜻蛉の日記』と命名する。作品中には兼家との贈答の他、長歌や連歌も含まれ、単に家住みの女性の日常を記録したのでなく、文才を世に認めてほしいと願う創作意欲の表れでもあったことが容易に想像できる。

## 二、女性の家集に見る自己表出

一方で、私家集も新たな展開を迎える。単に勅撰集撰進や歌合せ用に詠作を集めおいたのでなく、ある程度編纂意識をたどれるような個性的な集も見出せるようになる。『後撰和

歌集』（天曆五〇〇年撰集開始）の頃には成立していたとされる『伊勢集』は、特に冒頭部三十一番歌までの詞書の物語化が顕著である。次の傍線部のように自身を「人」と客観的な呼称を用い、さらに贈答歌の相手についても臚化表現を採りつつも、当時の読者には人物を特定できる書き方になっている。

寛平みかどの御時（いづれの御時にかありけむ・伊勢集 II・III）大宮す所ときこえける御局に、大和に親ある人さぶらひけり。親いとかなくして、なべての男は逢はせじと思ひてさぶらはせけるに、宮す所の御せうといとねむごろに言ひ渡り給ふを、いかがありけむ、親いかが言はむと思へど、さるべき宿世にこそあらめ、若き人頼みがたくぞあるや、とぞ言ひける。年ふるほどに、その時の大将の婿になりにけり（伊勢集 I）。

宇多帝女御温子のもとに出仕してまもなく、弟君の仲平と恋愛関係になった伊勢は、正妻になれない身の上を嘆きながらも、宮仕えを続ける。その間、兄君である時平にも関係を迫られ、さらには宇多帝の皇子をもうける。そうした波乱万丈な日々が、集には歌物語、あるいは日記風につづられているため、この冒頭部分は、のちに伴信友によって「伊勢日記」と呼称された<sup>23</sup>。日付を追って記載されるわけではないので、日々の記録とは言い難いものの、和歌を中心に現実の宮中での生活を描く点で新しく、ある女性の生き方を歌を中心

に描く手法として注目に値しよう。

さらには、宮中には全く縁がない、家住みの女も集を編んでいる。

賀茂保憲女（陰陽頭、曆博士、天文博士であった賀茂保憲〈延喜一七〇七年〜貞元二〇〇七年〉のむすめ）の家集は、長文の序文と、和歌二〇九首、長歌一首とからなる。序文には、次のように独特な人生観が綴られる。

しきしまの世の中、我が帝の御親族、国の内の司、千々の門、過ぎにし年頃、慣らへる月日の中に求むれど、我が身のごと悲しき人はなかりけり。年の積もるまゝに物思ひしげりける時に、思ひけるやう、はかない鳥といへど、生まるるよりかひあるは、巢立つこと久しからず。はかない虫といへど、時につけて声を唱へ身を変へぬなし。かかれば、鳥虫に劣り、木には及ぶべからず。草にだに等しからず。いはんや人には並ばず。

また、序文の末部には、傍線部のように自身を「女」と称し、集の編纂動機が語られている。

此の歌は、天の帝の御時に、もがさといふもの起りて病みける中に、賀茂氏なる女、よろづの人に劣れりけり。さる中に、ただもがさをなむすぐれて病みける。かさのみにもあらず、多くの病をぞしけると、からうじてこの歌よりなむよみがへりける。そのほど冬の初め、秋の終りなりければ、草木も風もやうやう枯れもていく。

つれづれなるままに、めづらしき病なりとて、このかさの除病を書き置ければ、病さるることに避くなむ。見む人忌々しく思ひぬべしとて、いささか色にも出ださず、ただ心ひとつに思ひて、我が身のはかなきこと、世の中の常ないことながむる夕べ、空に魂とる虫を詠み、ある時はあまたの魂を語りきて、歌合せをして、勝ち負けは心ひとつに定めなどしてぞ、慰めて明かし暮らしける。

（中略）題も知らする人もなし。ただ詠まるる時面白きにすれば、冬も桜心の内には乱る。夏の日にも心の内には雪かきくらし降りて、消えまがひなどすれば、定まることなくて、書き集むる手も定めたらず、端に書くべきことを奥に書き、奥に書くべきことは端に書き、定まることなし。もがさの盛りに目をさへ病みければ、枕上に面白き紅葉を人の置いたりければ、思ひ余りて、曇りつつ涙しぐるる我が目にも猶もみぢ葉は赤く見えけり。正月の頃ほひ、思ひ余りては、長歌もあるべし。

実は、「賀茂氏なる女、よろづの人に劣れりけり」といった自虐的な書きようは、保憲女オリジナルのものではない。先んじて成立した曾祢好忠の百首歌、及び三百六十首歌に、雲に鳴く鶴も、つひにむなしく、溝に這ふ虫も、心のゆくへは隔てなしと思ひなせば、難波なるあしきもよきも同じ事、好くも好かぬも異ならず、名を好忠と付けてけれど、いづこそわが身、人と等しきとぞや。（百首歌

序・天徳末(992年頃)。

花散る春の朝 木の葉の落つる秋の夕べ 月の明けき夏の夜 風の寂しき冬の暁までに 記せることはをこなれど 親の付けてし名にし負はば 名を好忠と人も見るがに (三百六十首・長歌・天禄二(971)年頃)

とあるのに倣うものである。好忠が考案した百首、三百六十首という定数歌は、形式だけでなく、身の不遇を訴嘆する具として当時河原院歌人を中心に流行した。保憲女は女性でありながら、序文にはもがさという病によって部屋に閉じこもり熱にうなされるような日々を送らなければならなかった苦しみを訴嘆し、集を序文、四季、恋と分類する点で、男性の定数歌に並ぶ。

また、同じく家住みの女性であった源重之女も、百首歌を詠む。重之女は生没年未詳だが、父、重之は清和源氏。長徳元(959)年陸奥守藤原実方に従って陸奥に下り、長保年中(999～1004)その地で没した。序文には、

昔より今に、歌といふもの多かれば、これを、歌の数にはあらねど、四季の歌とこそいふべかれ。春は花に心をあくがらし、夏は時鳥の声を寢覚めて聞く。秋は紅葉の深き山に心をいれ、冬は、古めきたる重之がむすめの言ひおきたることなれば、世にめづらしきことあらしのみ寒くなりつつ、恋の路も閉ぢられたるにやあらむ。逢はで思ふなるべし。

と、傍線部のように自身を「古めきたる重之がむすめ」と呼称しており、保憲女集と同様、身の不遇を百首歌によって訴嘆したことがわかる。

道綱母、保憲女、重之女は、ともに宮仕えをしたことのない一女性であった。しかしながら、「天下の品高きためににもせよ」「賀茂氏なる女、よろづの人に劣れりけり。さる中に、ただもがさをなむすぐれて病みける。かさのみにもあらず、多くの病をぞしけると、からうじてこの歌よりなんよみがへりける」「古めきたる重之がむすめの言いひおきたる」といった具合に、それぞれに不遇意識を持ちながら、自分の生きた形跡をなんとか残そうと作品を生み出していった。公的に名を残すべがないまま、生きた証を歌に託した一人としてのチャレンジが、『蜻蛉日記』であり、定数歌の流れにある『賀茂保憲女集』『源重之女集』であったと言える。清少納言や紫式部のように、宮仕えの生活の中、整った環境と同じ教養レベルの読者に恵まれて作品を生み出していったのではない、生涯名を残すこともないだろう女性たちの自己表出の模索の跡を窺い知ることができよう。

『和泉式部集』にも百首歌があり、重之女の百首歌との密接な関係についてはすでに指摘されている。和泉式部もまた、自己表出の手段として和歌の新たな型に挑戦してきたのであった。

### 三、『和泉式部日記』における先行定数歌の影響

『和泉式部日記』が、和泉式部の自作か他作かについて、いまだに決定的な証左はない。寛元本（寛元四1246年の奥書・近世書写）、応永本（応永二一1414年の奥書、近世書写）は『和泉式部物語』の題号を持ち、主人公が「女」と三人称で呼称されること、作品内部に作者の目の届かないはずの内容が含まれること、跋文に

宮の上御文書き、女御殿の御ことば、さしもあらじ  
（寛・あらじかし）。書きなしなめり、と本に。（日記・岩波p105）

とあることなど、物語的な手法を取る点から、作者を和泉式部と特定しない見方もある。現在では、作者の知り得ない事柄、例えば宮の邸内での出来事や宮の心情などが描かれていても、それは、和泉式部の想像が及ぶ狭い範囲の事にすぎず、それをもって他作とはいえないことなどから、自作説が主流になっている。

前章で指摘したように、三人称呼称は「世に経る人」（『蜻蛉日記』）、「大和に親ある人」（『伊勢集』）、「賀茂氏なる女」（『賀茂保憲女集』）、「古めきたる重之がむすめ」（『源重之女集』）のように見られ、三人称呼称をもって、『和泉式部日記』を他作とは言えないだろう。

一方、宮本芙万子「和泉式部日記著作についての一試論」

その矛盾点と構成の問題を中心として――は、作品が自作である根拠として、日記歌と『和泉式部集』の表現の類似を次のように指摘した。<sup>7)</sup>

・雨のつれづれなる日（続集・六九）

雨うち降りていとつれづれなる日頃（日記・岩波p25）

など、詞書九例。

・あはれとも言はましものを人のせし暁起きは苦しかりけり（続集・四四五）

宵ごとに帰しはすともいかでなほ暁起きを君にせさせじ

（日記・女・岩波p32）

加えて、森田兼吉『和泉式部日記論攷』は、

・その夜も、かたはしにて、「うらやましようも」と見るま

まに（続集・五九九）

月の明かき夜、うち臥して、「うらやましくも」などながめらるれば、宮に聞ゆ。（日記・岩波p37）

・よそにても同じ心に有明の月見ばそらぞかきくもらまし

（続集・五九九）

よそにても同じ心に有明の月を見るやとたれにとはまし

（日記・女・岩波p55）

・暮れつきた、霧たたずまひ、空のけしきなど、あはれ知れらむとて／今はとて立つ霧さへぞあはれなるありしあしたの空に似たれば（続集・六〇六）

九月廿日あまりばかりの有明の月に御目さまして、いみ

じう久しうもなりにけるかな、あはれこの月は見るらむかし（日記・岩波P50）

・五日、風はげしう吹きて、残りなく散る、ことの葉も／わくらばにとふことの葉も山風の吹く音をのみ聞かむと思ひし（続集・六三四）

その夜の時雨、つねよりも木々の木の葉残りありげもなく聞こゆるに（日記・宮・岩波P74）

・山のあなたにとのみ、二日臥したるに、火桶とてお「」（本ノママ）るに／手すさびやしけむと思ふにいとどしく思ひの灰はゐられざりけり（続集・六四二）

さりとて『山のあなたに』しるべする人もなきを（日記・岩波P62）

・けさはしも思はむ人はとひくまじつまなきねやの上はいかがと（一九八／続詞花・恋下・六六四・和泉式部）

われもさぞ思ひやりつる雨の音をさせるつまなきやどはいかにと（日記・宮・岩波P27）

・語らへばなぐさむこともあるものを忘れやしなむ恋のまぎれに（正集・一七三／続集・五七〇／後拾遺・雜四・一〇九五）

語らへばなぐさむこともありやせむいふかひなくは思はざらなむ（日記・宮・岩波P15）

と、『和泉式部集』と『日記』の表現の類似を指摘し、さらに、久保木寿子『和泉式部の方法試論』は、「はかなし」「心

細し」という感情を軸に、『日記』と帥宮挽歌群に共通の「追懐の方法」が見出せることを指摘する。

稿者は、かつて、『日記』歌における『源重之女集』、『源重之子僧集』の影響を指摘した。

宮が初めて女の家を訪れた翌朝、宮から贈られたのは、

恋といへば世の常の<sup>⑨</sup>とや思ふらむ今朝の心はたぐひたになし（日記・宮・岩波P18）

と、「恋」という言葉で表すと世の中<sup>⑨</sup>にありきたりのことと  
思うでしょうが、あなたと初めて共寝をした今朝の心は、たとえようもない切なさです、と訴えるものであった。この初句は、

恋といへば同じ名にこそ思ふらめいかでわが身を人にし  
らせむ（拾遺集・恋一・六七七・よみ人知らず）

にも見られるが、「たぐひ」という語とともに他と比べようもないと詠むのは、

いへば世の常のこととや人は見む我はたぐひもあらじと  
思ふを（重之女集・八九）

の傍線部と表現も和歌の内実も似通う。

ほかに「恋」「思ひ」というような恋心を他と比べて「たぐひなし（あり）」と詠むのは、次の通り。

たぐひなく命絶えなば我が恋にいかなる人かつかむとす  
らむ（保憲女集・一四八）

わがごとくもの思はむ人をまたもがなたぐひありけりと

聞かば頼まむ（長能集・三七）

たぐひなき恋する人のあたりに花たちばなもかばかり  
やなる（馬内侍集・一七四）

たぐひなくうき身なりけり思ひ知る人よにあらばとひも  
してまし（和泉式部集・六九二）

たぐひあらばとはむと思ひしことなれとただいふかたも  
なくぞ悲しき（和泉式部続集・一〇六）

こうしてみると、やはり宮の歌は、重之女歌に近しく、影響  
下に詠まれたものと言えるだろう。

また、初めて女の家を訪れ、拒む女を口説く際に詠まれた、  
はかみなき夢をだに見て明かしては何をか夏の（三条  
西・のちの）よ語りにせむ（宮・岩波P17）

については、『重之子僧集』の

語らふ人の、さすがにむつまじからぬを、怨み遣はず  
逢ふこともなくてやみぬるものならば何をこのよ（夜・

世）の思い出にせむ（重之子僧集・五二）  
さらば、もの隔て聞こえむと侍れば、

関の戸にあらましものをなかなかに逢坂を急ぎ越え  
けむ（五三）

を参考にした可能性を指摘した。宮歌の「よ語り」はここで  
は思い出の意味。「何をこのよの思い出にせむ」とほぼ同意  
である。「何を…にせむ」は、他には

わかつよりあしたの袖ぞ濡れにける何をひるまの慰めに

せむ（蜻蛉日記）

とあり、道綱母と同母兄弟の長能にも

うきことも恋しきこともふりぬれば何をか今は言の葉に  
せむ（長能集・五五）

がある他は、

月かげの雲隠れぬるものならば何をうきよの慰めにせむ  
（重之子僧集・二六）

何をかも慰めにせむ冬山のふりつむ雪のとくる待つ間は  
（源賢法眼集・三八）

花もみな夜吹くる風に散りぬらむ何をか明日の慰めにせ  
む（和泉式部集・五九三）

があるのみ。「何を慰めにせむ」はある程度類型化した表現  
だったかもしれないが、「何を思い出にしよう」という表現

性は、宮歌と子僧歌のみに共通である。さらに、『重之子僧  
集』の二首目、「関の戸にあらましものをなかなかに」の

「ものをなかなかに」は、日記歌の宮歌、

うち出でも（寛・うちてても）ありにしものをなかな  
かに苦しきまでも嘆く今日かな（日記・宮・岩波P14）  
と重なる。

以上のように、『日記』歌に先行定数歌の影響が色濃く見  
出せるということは、翻って考えると、初期百首の形式に  
倣って百首歌を詠んだ和泉式部が『日記』の書き手であった  
ことを証明することにもなるのではないだろうか。

他には、

ひたすらに（三条西・ひたぶるに）待つともいはばやす  
らほで行くべきものを妹が家路に（三条西・君が家路  
に）（日記・宮・岩波P19）

の「妹が家路」は、応永本、寛元本に共通。平安時代には、  
次のように古風な表現としてもつばら和歌に用いられた表現  
である。

春の雨にありけるものをたちかくれ妹が家路にこの日暮  
らしつ（古今六帖・四五三・赤人）

来てみよと妹が家路に告げやらむわがひとり寝るとこな  
つの花（後拾遺・夏・二二七・曾禰好忠）

『日記』中、相手を呼ぶ呼称としては「君」が十九例。「妹」  
はこの一例のみ。宮歌の「行くべきものを妹が家路に」は、  
好忠の「来てみよと妹が家路に」を承けた表現である可能性  
がある。

また、

道芝の露とおきある人により我がたまぐらの袖もかわか  
ず（日記・女・岩波P65）

に詠まれる「道芝の露」も、

消えは返りあるかなきかの我が身かなうらみてかへる道  
芝の露（小大君集・六二）

道芝の露うちはらひしるべする人をいづれのよにか忘れ  
む（重之子僧集・四八）

かひなくて有明の月にかへりなば濡れてやゆかむ道芝の  
露（高遠集・二二）

夏の日のあしにあたればさしながらはかなくきゆる道芝  
の露（和泉式部集・百首・二四）

と用例は少なく、『重之子僧集』や和泉式部の百首歌に詠ま  
れていることも注目される。

「和泉式部百首」が「重之女百首」の影響のもとに詠出さ  
れたものであることは、前述の通り既に詳細に論じられてい  
る。例えば、百首歌の春部末尾部から夏冒頭にかけては、次  
のような対応が見られる。

「重之女百首」  
春（末尾部）

若駒の綱引く春になりにけり春果てがたの庭の小草も  
（二六）

春深みところもよかず咲きにけり井手ならねども山吹の  
花（一七）

岩高くなどて咲きけむ岩躑躅なべての花にまさるともな  
し（一八）

住吉の岸ならねども藤波は咲くべきほどに咲くにぞあり  
ける（一九）

夏廿

形見とて深く染めてし花の色を薄き衣に脱ぎやかふらむ  
（二〇）

寢覚めつつ声待ちわびぬ時鳥初音はここにまづも鳴かなむ(一一)

「和泉式部百首」  
春(末尾部)

隠れ沼もかひなかりけり春駒のあされば菰の根だに残らず(一七)

河辺なる所はさらに多かるを井手にしも咲く山吹の花(一八)

岩躑躅折りもてぞ見る背子が着し紅染めの衣に似たれば(一九)

花はみな散り果てぬめり春深き藤だに散るないましばし  
みむ(二〇)

夏

桜色に染めし衣を脱ぎかけて山時鳥けふよりぞ待つ(二一)

待たねども物思ふ人はおのづから山時鳥まづぞ聞きつる(二二)

また、『重之女集』と『重之子僧集』もまた、その序文の内容がほぼ合致することから、極めて近い関係にあったことがうかがえる。

『重之女集』序文(前出)

昔より今に、歌といふもの多かれば、これを、歌の数にはあらねど、四季の歌とこそいふべかめれ。春は花に心

をあくがらし、夏は時鳥の声を寢覚めて聞く。秋は紅葉の深き山に心をいれ、冬は、古めきたる重之がむすめの言ひおきたることなれば、世にめづらしきことあらしのみ寒くなりつつ、恋の路も閉ぢられたるにやあらむ。逢はで思ふなるべし。

『重之子僧集』序文

世をそむきて、さるべき所々こもり行ふ念誦のひまひまに、ひとりごち、またあひ語らふ人の言ひすすむることにつけても、過ぎにし方を思ひ出でて、行末を思やりつつ、年月のかはる折々、春は花に心をあくがらし、夏は時鳥の声を寢覚めに聞き、秋は紅葉の深き山に心をいれ、冬は氷の鏡に向かひて雪の山を見るごとに、老ひの涙をとどめがたければ、書き尽くる水茎のあとも今はつつましくなむ。

和泉式部が、重之女、重之子僧というほぼ無名の歌人の影響を色濃く受けていること、『日記』歌も同様であることを鑑みると、この作品の作者を和泉式部自身と規定することに不自然さはないように思われる。

「恋といへば」「はかもなき」「うち出ででも」「ひたすら」は宮の歌ではあるものの、宮と和泉式部の歌の共通性はすでに指摘もある。

小町谷照彦氏は、『和泉式部日記』における「心」「ながめ」などの心情語をはじめ、歌語の分析から、作中詠の特質

を整理した上で、帥宮の歌自体が和泉式部自身の創作であるという可能性を示唆され、次のように論じておられる。

和泉式部日記が贈答歌に終始するということは、作品世界がむしろ自己の想念の世界における自問自答によって進展することになり、まさに独自の性格を呈することになる。和泉式部の歌と帥宮の歌との間には、決定的な対立や懸隔はない。和泉式部は、帥宮との贈答歌をひたすら自己の体系に則して作品として秩序立てしているのであり、帥宮の歌をも和泉式部がすべて詠作したとしても、作品の世界の性格は少しも変わらない、といつてもよい。

同じく別稿でも、

『和泉式部日記』の作品世界を成立させているものは、和泉式部と敦道親王との贈答歌であり、その贈答歌の様態は現実では見られないような形式のものが多数あり、そのような特異な形式の贈答歌が両者の愛情の深化の節目の位置に配されていて、極端な言い方をすれば、『土佐日記』の場合などと同じく、日記中の和歌全体が式部の創作であるとしてもよいような作品内容となっているのである。

と指摘する。『日記』の宮歌における先行定数歌の影響については、宮の創意か和泉式部の手が加わった可能性があるか、難しい問題ではあるが、『日記』歌のこうした特徴は、

作品の作者が他人でなく和泉式部本人によるものであることを裏付ける根拠ともなる。

#### 四、習作のひとつとしての『和泉式部日記』

前章までに『和泉式部日記』自作説の根拠の一つとして、初期定数歌からの影響を述べてきた。実は、『和泉式部集』には、和泉式部の歌学びともいうべきさまざまな歌群が認められる。たとえば、集の百首歌に続く歌群の冒頭には、和泉式部と帥宮が藤原公任の白河山荘を訪れた際の贈答歌が収められている。

いづれの宮にかおはしけむ、白河院まろもろともにおはして、かく書きて家守りにとらせておはしぬ

われが名は花盗人と立たば立てたただ一枝は折りて帰らむ  
(九八)

この一首目は宮の歌で、以下九首の贈答歌が並ぶが、詞書に帥宮の名前を出さずに「いづれの宮にかおはしけむ」と臚化表現を採る点は物語的で、和泉式部自身による詞書でない可能性はあるものの、二人の外出の際の歌のやり取りを甘美な物語として書きとどめようとしたかのようである。他にも、親から勘当された際の心境を、

心にもあらずあやしき事出でて、例住む所も去りて嘆くを、親もいみじう嘆くと聞きて言ひやる、上の文字は

世の古ことなり

として、「いはほの中に住まばかは」という古歌を句の一字目に置く連作（正集・四三三から四四四）や、「親身岸額離根草、論命江頭不繫舟」の一字ずつを頭に置いた題詠歌（正集・二六八から三一〇）などもある。「世間（よのなか）にあらまほしき事」「人に定めさせまほしきこと」「あやしきこと」「苦しげなること」「あはれなること」（正集・三三六から三五三）は、『枕草子』の類聚章段のようでもある。帥宮を偲ぶ挽歌は「帥宮挽歌群」と言われるが、その中には、つれづれのつきせぬままに、おぼゆる事を書き集めたる歌にこそ似たれ。昼偲ぶ夕べのながめ宵の思ひ夜中の寢覚め曉の恋、これを書き分けたる

と和歌を題に詠まれた連作もある。続集末尾部分の日次歌群は、『日記』の創作とも密接な関係にあることがすでに指摘されている。<sup>⑩</sup>

『日記』は、女からの贈歌から始まる。男からの贈歌と女の返歌、といった一般的な恋の贈答のルールを破り、時にはそのやりとりが同一の歌語をキーワードとして何往復も続く。手習い文の五首贈答（岩波P52）、代作（岩波P57）、連歌（岩波P71・92）、作文に絡む贈答（岩波P89）があり、宮を相手に和歌の腕を競うがごとき掛け合いが見られ、時系列に基づく日々の記録でありながら、あたかも、さまざま恋のやり取りのバリエーションを集めたかのような意図的な

創作意識を読み取れるのである。体験をもとにしつつ、世間に公表することを意識し、虚構を含んだ読み物として書かれた、自己表現の手段としてのあらたな型が『和泉式部日記』なのではないだろうか。

三章に挙げた『日記』跋文、

宮の上御文書き、女御殿の御ことば、さしもあらじ（寛・あらじかし）。書きなしなめり、と本に。（岩波P105）

が、のちの書写者によるものでなく、はじめから『日記』本文であったことについては、同時代までの他の作品の書きぶりからもわかる。<sup>⑪</sup>

『大和物語』九五段・越路の雪

御返りあれど、本になしとあり。

『蜻蛉日記』末文

京の果てなれば、夜いたう更けてぞたたき来なる、とぞ本に。

『うつほ物語』末文

これ一つにては多かめれば、中より分けたるなめり、と本にこそ待るめれ。

『枕草子』この草子、目に見え心に思ふ事を

それよりありきそめたるなめり、とぞ本に。

『源氏物語』夢の浮橋・末文

わが御心の、思ひ寄らぬ隈なく落としおきたまへりしならひにとぞ、本にはべめる。

『堤中納言物語』思はぬ方にとまりする少将

とぞ、本にも侍る。…本にも「本のまま」と見ゆ。

『土佐日記』が女性に仮託して書かれたように、読者を想定して日記が書かれる時、そこに創作性、虚構性が混じるのは至極当然の事であろう。読者は織り込み済みで、書かれた『日記』を楽しんだのではないだろうか。

## 五、形見としての『和泉式部日記』

そこで、参照されるのが、次の和歌である。

語らふ人の、心地重くわづらひて、これを形見に見

よとて、歌書きたる草子をおこせたるに

忍ぶべき命も知らで今日よりは君が形見を見るぞ悲しき

(和泉式部続集・二二五)

参河入道の参河なりしほど、女の亡くなりける

に、京にのぼりて、姑のもとにありて、また下る

に、あはれなる歌詠み交はしたりけるを書き置いた

りし草子を見て

あはれ知る涙はさらにおほかたの人のためとも分かずそ

ありける(道済集・四)

前大納言公任書き置きたる歌を形見にせむと契りてのち、かくばかりふること難き世の中にかたみに見する

跡のはかなさ、と申しつかはしたりける返事に

ふることは難くなるとも形見なる跡は今来む世にも忘れ  
じ(道信集・一一〇)

道信の中将詠みたる歌ども書き集めたるかたみ(形

見に・互に)見せむと言ひやるとて

かくばかりふること難き世中にかたみにすめる跡にぞあ

りける(公任集・四五二)

返し

ふることは難くなるとも形見なる跡は今来む世にも忘れ

じ(同・四五三)

好忠の三百六十首歌の中の長歌には、

…思ひのほかに すぐしやり かひなき身をば 心の

うちに 嘆きつつ よを長づきの すゑまでに 耳に聞

き 目に見る事を 記し置かば 露の命は 消えぬとも

ゆく水たえぬ この葉を 流れて秋の 形見とも見

よ(II・一一五)

とあり、『紫式部集』には、

少将の君の、書き給へりしうちとけ文の、ものの

中なるを見つけて、加賀少納言のもとに

くれぬまの身をば思はで人の世のあはれを知るぞかつは

かなしき(一二四)

たれか世にながらへて見む書きとめし跡は消えせぬ形見

なれども(一二五)

ともある。

和歌を書き集めたものを形見として残し、後人に見てほしいと願ったことが、以上の例から窺える。

『和泉式部続集』帥宮挽歌群には、

同じ所の人の御許より、御手習のありけるを見よ、  
とておこせたるに

流れよる泡となりなで涙川はやくのこを見るぞ悲しき

(四〇)

つかはせ給ひし御硯を、同じ所にて見し人の乞ひたる、やるとて

飽かざりし昔のことを書きつくる硯の水は涙なりけり

(八四)

御文どものあるを破りて、経紙に漉かすとして

破る文にわが思ふことし書かれねば思ふ心の尽くる夜も

なし(八六)

と、帥宮の筆跡や硯を見ては昔を偲び追悼しながら、宮の成仏を願ひ供養に努めようとする和泉式部の思いが詠まれている。『和泉式部日記』もまた、宮との思い出を形見に書き残し、後人に読んでほしいという願いから書かれたものではなかったか。

『蜻蛉日記』にも、

春の夜のつね秋のつれづれ、いとあはれ深きながめをするよりは、残らむ人の思ひ出でに……(『新編日本古典文学全集』p 307)

とある。宮の形見としての思い出日記は、和泉式部自身の書くことの試みのひとつとして位置付けられよう。その思い出の記には、和泉式部の創作意識ゆえの虚構も混じるだろう。

すまわち「女」の知り得ないことが描かれたとしても、それは女の心眼を通しての記録であったためなのだ。

益田勝実「かなぶみに型がなかった頃——『紫式部日記』作者の表現の模索——」には、

かな文字による散文の創造、はやいころのかなぶみの作者たちの仕事は、同じように文字を操って進める手仕事でありながら、漢文を書くことと、根本的に性格が違っていた。漢文は、カタを駆使する文章制作で、すでに〈文章道〉として確立されているその制作技術を、かなぶみに転用することは容易でなく、必ずしも有効ではなかった。

と指摘されている<sup>14</sup>。『和泉式部日記』も「かなぶみに型がなかった頃」の新たな試みとして評価することができよう。事実に基づいた『蜻蛉日記』に倣いつつ、その書き方を継承したというより、自ら型を模索しながら、新たに創作性を加えて生み出した作品といえるのではないだろうか。『日記』に書かれた事実と虚構を分別し、和泉式部の知り得ないことに筆が及んでいることの理由を他作説に結びつけることはもはや時流にないにしても、あえてこの作品を、「事実に基づく日記」でなく「虚構を含む物語」として位置付ける必要性は

ないように思う。

福家俊幸「日記文学研究の可能性―『紫式部日記』『更級日記』を中心に―」は、

日記文学の始発である『土佐日記』が漢文日記をもどく形で成立したように、日記文学と呼ばれる仮名日記が記録から意図的に離れて成立したことは言うまでもない。仮名日記には虚構が含まれている。事実と虚構の問題の解明は日記文学研究の有力な方法であろう。そして、その虚構化の拠って立つ基盤は、やはり書き手の内面に求めることが多かったように思われる。書き手の心的状況が自立した表現の世界における自己の体験の改変ないし脚色につながったというのである。しかし、そのいわば「あらまほしき」世界の希求は、社会的に抑圧された無力な存在が表現の世界でその桎梏から解放されたという前提に縛られていたように思われる。論者の立場からすれば、仮名日記に内在する虚構化も享受層や所属する集団の受容や論理に応じる場合があり、時に事実を知る、享受層を巻き込んだあそびでもあったように思われる。

と論じている。<sup>(5)</sup>『和泉式部日記』は、和泉式部本人の手による作品であり、宮の内面にまで思いを寄せて形見として書き残した、「かなぶみに型がなかった頃」の新たな試みだったとして評価されるべきではないだろうか。

〔注〕

(1) 以下、和歌の引用は、『新編国歌大観』『私家集大成』（古典ライブラリー）に、散文は『新編日本古典文学全集』（ジャパナレッジ）に拠り、適宜表記を改めた。『和泉式部日記』本文は、清水文雄校注『和泉式部日記』（岩波文庫・一九九二年五〇刷）に拠り、頁数を記した。また、一部、応永本系統、寛元本系統の諸本を参照し、必要に応じてその旨を記した。

(2) 伴信友「表章伊勢日記附証」の題号に拠る。後藤祥子「日記文学と和歌」（『日記文学事典』勉誠出版・二〇〇〇年）には、足立稲直により命名された、ともある。

(3) 『賀茂保憲女集』における初期定数歌の影響などについては、拙著『賀茂保憲女集新注』（青簡舎・二〇一五年）解説参照。

(4) 『源重之女集』『源重之子僧集』における初期定数歌の影響などについては、武田早苗氏との共著『重之女集重之子僧集新注』（青簡舎・二〇一五年）解説参照。

(5) 平田喜信「和泉式部百首の成立」「和泉式部と曾禰好忠」（『平安中期和歌考論』新典社・一九九三年所収）、久保木寿子「和泉式部百首全釈」（『風間書房』二〇〇四年）、「和泉式部百首論」（『和泉式部の方法試論』新典社・二〇二〇年所収）など。

(6) 古くは、川瀬一馬が黒川家旧蔵本の奥書により、「和泉式部日記は藤原俊成の作」（『青山学院女子短期大学紀要』一九五三年九月）を發表して注目を集めたが、現在は奥書の信憑性から否定されている。以後、物語の視点から和泉式部以外の

- 第三者の創作とする今井卓爾『平安時代日記文学の研究』（明治書院・一九五七年）、同『和泉式部日記 譯注と評論』（早稲田大学出版部・一九八六年）、秋澤互『和泉式部日記』の視線―超越的視点の再吟味を通して―（『活水日文』二〇〇四年一月）や、用語の新しさから成立を平安後期ごろとする他作説（伊藤博『和泉式部日記研究』笠間叢書・一九九四年、尾高直子『和泉式部日記』―他作の可能性について―平野由紀子編『平安文学新論』風間書房・二〇一〇年所収）なども見られるが、『日記』歌と『和泉式部集』の表現の類似性などから、現在では自作説が主流となっている。
- (7) 『平安文学研究』（一九六一年六月）
- (8) 森田兼吉『和泉式部日記論攷』（笠間叢書・一九七七年）、久保木寿子『和泉式部の方法試論』（新典社・二〇二〇年）
- (9) 拙稿『和泉式部日記』成立試論―「源重之女集」「子の僧集」との関連をめぐって―（『日本語と日本文学』二〇〇八年二月）
- (10) 『和泉式部日記の贈答歌の達成』（『論集和泉式部』笠間書院・一九八八年）
- (11) 『和泉式部日記 表現の論理』『王朝女流日記必携』（學燈社・一九八九年）
- (12) (8)に同じ。
- (13) 『蜻蛉日記』の「とぞ本に」については、後人の書入れとする解釈（犬養廉校注『蜻蛉日記』（『日本古典集成』新潮社・一九八二年）、木村正中・伊牟田経久校注・訳『蜻蛉日記』（『新編日本古典文学全集』小学館・一九九五年）などもある。「かなぶみに型がなかった頃―『紫式部日記』作者の表現の模索―」（『国語と国文学』一九八四年五月）
- (15) 「日記文学研究の可能性―『紫式部日記』『更級日記』を中心に―」（『中古文学』二〇二三年五月）